

父親の遺体は丁重に扱われていると聞いていたが、生前と同じ状態では決してないだろう。凧は学校の授業で見せられた薬品づけの検体を思い出した。硝子に湾曲していた永遠の死。青白く脱色し、ふやけて膨らんでいた肉の塊はひどく不気味で、それが命を宿していたとはとても思えなかった。父親もあんな姿になってしまったのだろうか。しかし、たとえそんな姿であっても生きていればまだ救いがある。もう目を開けず動かない父親の姿を見るのは嫌だった。

「葬儀は私が執り行う。なるべく君の負担にならないようにしよう」

凧はカップに口をつけたまま小さくうなずいた。このまま何か言葉が発すれば声が震えてしまいそうだった。

隣にいる言峰を見あげると静かに見かえされていた。自分のことばかりを考えてしまいがちだが、言峰も自分とおなじように父親を亡くしたばかりなのだと思ひ出した。だが言峰は悲しむそぶりなど一切見せず、凧の世話を焼いてくれている。

「綺礼も、綺礼の父さまが死んで悲しいのでしょうか？」

凧の問いに言峰は答えず、薄い笑みを浮かべたその顔つ

きには濃い陰影が落ちかかっていた。色々な感情を押し殺した顔は何を考えているのかわからなかったが、重々しい印象を凧の心に残した。

黙っていると室内は物音ひとつせず、隅々からしんとした気配が迫ってくる。

「綺礼、頭、出して」

怪訝そうな顔つきをしながらも、言峰が凧の言うとおりに頭を傾げてくる。凧は言峰の頭に手を置いて慰めるように叩いた。かたい髪感触がなぜか懐かしかった。

「わたしはすぐ泣くけど、綺礼は泣かないものね」

「大人だから」

しばらくされるがまだだった言峰が、上目づかいに意地悪な目を向けてきた。すぐ近くにあらわれた言峰の表情に凧は一瞬たじろいでしまい、そんな自分が恥ずかしくなった。

「どうせ子供だもの」

凧がむくれると言峰は微かに笑い、

「子供でいられるうちは子供でいい」

頭を起こすと、お返しにと言峰は凧の頭を叩いてくれ、くすぐったい感触に凧ははにかんだ。不思議なものだ。父

親を亡くしてから消えることのなかった胸が裂けるような悲しみも、言峰といるだけで薄らいでいく気がする。誰もいない家の空洞を埋めるのとおなじように、言峰は心の空洞をも埋めてくれる。だから良い子でいようとしても、言峰の前だけではつい気を許し、感情を露呈ろていさせてしまう。

おそらく、言峰は自身の父親の死に関して本心を語りたくないのだろうと凜は考えた。会ったことはないが、言峰の父親も立派な聖職者だったという。父親とはおしなべて立派で尊敬できる存在だとその時の凜は思っていたから、当然言峰も死んだ父親を悼いたんでいるのだと考えていた。積まれた本の山を見やりながら言峰が口を開いた。

「こういうとき、誰かが死んだときに思い出す歌がある」  
「歌？」

歌という単語と目の前にいる青年をなかなか結びつけられず、凜は思わず訊きかえした。

「外国の童話だ。鳥の葬式の歌」

「鳥がお葬式をするの？」

「そうだ」

言峰は本を眺めたままうなずき、

「死んだのは駒鳥こまどりの雄。誰が殺したのかという問いに、自

分が殺したと雀すずめが答える」

「その先は？」

予想よりも物騒な内容と不思議な印象が気になり、凜は先をせかした。

「周りの鳥たちが葬儀の準備を算段する。鴉からすが牧師になり、雲雀ひばりが助手を務め、梟ふくろうが墓を掘る。喪主は駒鳥の恋人だった鳩」

「ね、歌ってみて」

聞けば聞くほど凜はその内容が知りたくてたまらなくなつた。目を輝かせながらせがんだ凜に、言峰は思い出すように手を広げてみせた。

「英語の歌だね」

そう前置きして、呟くように歌いはじめた。英語のわからない凜には何を意味しているかまでは聞き取れないが、低い言峰の声のせいか、淡々としながらもどこかもの悲しい旋律はひどく新鮮に聞こえた。凜は途中のいたるところで歌を遮っては翻訳を求め、言峰は丁寧ていねいに解説を加えてくれた。

誰が殺した駒鳥を。

私が殺したと雀が言った。私の槍で、私の弓矢で、私が